

北海道雪合戦連盟ルール・審判委員会合同検証会 結果報告

日 時 平成22年10月24日(日)
10:30-16:00
会 場 札幌市 滝野すずらん丘陵公園

1 開催の趣旨

近年、ルール改正については個々の選手のレベルでも様々な提案や議論がされているが、これらの意見も参考にしたうえで、北海道雪合戦連盟としても、現在、雪合戦競技が抱えている構造的な問題を中心に、独自に情報やデータを蓄積し、主体的にルールの改正内容を検討・検証することで、オール北海道としての公式見解をとりまとめ、今後の日本雪合戦連盟でのルール改正案検討に対応していくことを目的とする。

2 出席委員

- ルール委員会：阿野委員・田仁委員(胆振)、石田委員(道北)
阪東委員/正木委員代理・新谷委員/佐々木委員代理(道央)
- 審判委員会：藤木委員・小林委員(胆振)、
日戸委員・磯田委員/川村委員代理(道央)
- 両委員会兼任：渋谷委員(道北)、森田委員・吉田委員(オホーツク)

3 デモンストレーションゲーム協力チーム・協力者

- 協力チーム：あたり屋本舗6名(道央)、げきだんはちにん3名(道北)、
室蘭工業大学雪合戦部9名(胆振)、AS・SC4名(胆振)
- 協力者：道央ブロック支部・SPAC滝野管理センタースタッフの皆さん

4 検証会の運営方法

(1) 検証課題(9月4日開催「ルール・審判委員会合同会議における抽出課題」)

- ア) 競技開始直後のセンターシェルター付近での混乱の改善方法
- イ) コートレイアウトの改正案
- ウ) 審判の基本的な立ち位置と向きについて

(2) 検証方法

- ア) 協力チームがそれぞれ競技者と審判員となり、現行競技規則にはない改善ルールをいくつか設定し、その改善ルールに基づくデモンストレーションゲームを複数回実施
※ただし、副審の向き・立ち位置の検証については各委員が副審として入って検証
- イ) 各委員は、コート周囲に立ち、競技の流れや審判の様子を確認
- ウ) 数試合終了毎に、各委員や協力チーム選手の感想・意見を聴取
- エ) 上記の意見を参考にさらに新たな改善ルールを検討し、実践検証
- オ) その他に、デモンストレーションゲームの様子をDVDに収録(定点記録)
- カ) デモンストレーションゲームの終了後、委員のみによる検証結果のとりまとめ

5 改善ルール案と検証結果（意見要旨）

【課題1】競技開始直後のセンターシェルター付近での混乱の改善方法

① 競技開始時の雪球の個数を2個未満とする

→1個ではあまり改善効果がなく、0個の場合はシャッターに雪球を取りに戻る間に、フラッグ奪取されてしまう。全体的に2個未満にすると開始直後のフラッグ奪取を誘発する傾向が強く、改善策として得策ではない。

② センターシェルターの大きさを半分（90cm）にする

→2トップによる攻撃はほぼ不可能であり、判定の精度向上には非常に効果的である。しかし、センターシェルターに入った選手が想像以上に容易にアウトにされるため、センターシェルターを確保したチームがかえって不利になることが判明した。これにより、守備的な戦術が増えることが想定され、競技としての魅力が薄れる恐れがあるほか、そもそもセンターシェルターが必要かという問題も生じる。

③ センターシェルターを撤去し、第1シェルターの大きさを2倍（180cm）にする

→競技性について疑問視する声が多かった。

④ センターシェルターに入る人数を1人以下に制限する

→競技の魅力さをさほど損なわず、同時に正確な判定がしやすいが、「センターシェルターに入る」の定義・解釈などの相違や競技規則上の文言整理など、今後詰めなければならない問題も生じることが予想される。

【結論】 いずれも一長一短ある。

混乱（ガチンコ）対策だけならセンターシェルターを半分にすることで改善できるが、明らかに競技の魅力がなくなる。

今回だけで結論を出すのは難しいと判断し、次回の日本連盟ルール改正時まで、北海道連盟として、さらに多角的な検討を継続し、結論を導き出したい。

【課題2】コートレイアウトの改正案

① 36mコート統一を前提として、現行36mコートにおける第2シェルター・フラッグ・バックライン位置をそれぞれ2mエンドライン側に下げる

→現行の36mコートではセンターシェルターに2人入れた速球派のチームが圧倒的に優位になる（偶然性が強くなる）傾向があり、様々な技術・実力を競うゲームにならない恐れがある。また、バックラインのみを2mさげるだけでも、いわゆるフリー（シェルターに入らないフォワード）の選手が動けるエリアが広がるので、バックライン位置のみの改正でも効果があると考えられる。

【結論】 センターシェルターの有無、大きさによっても影響が生じる問題であり、課題1と合わせて、総合的に検討を継続する。

【課題3】 審判の基本的な立ち位置と向きについて

① センターライン上以外の副審はセンターラインの方向を見るようにする

→シェルターにワンバウンドした雪球などを見極めるには、センターライン向きの方が望ましいが、特に経験の浅い審判などは、試合全体を目で追ってしまい、眼前のアウトを見落としてしまう傾向が強い。

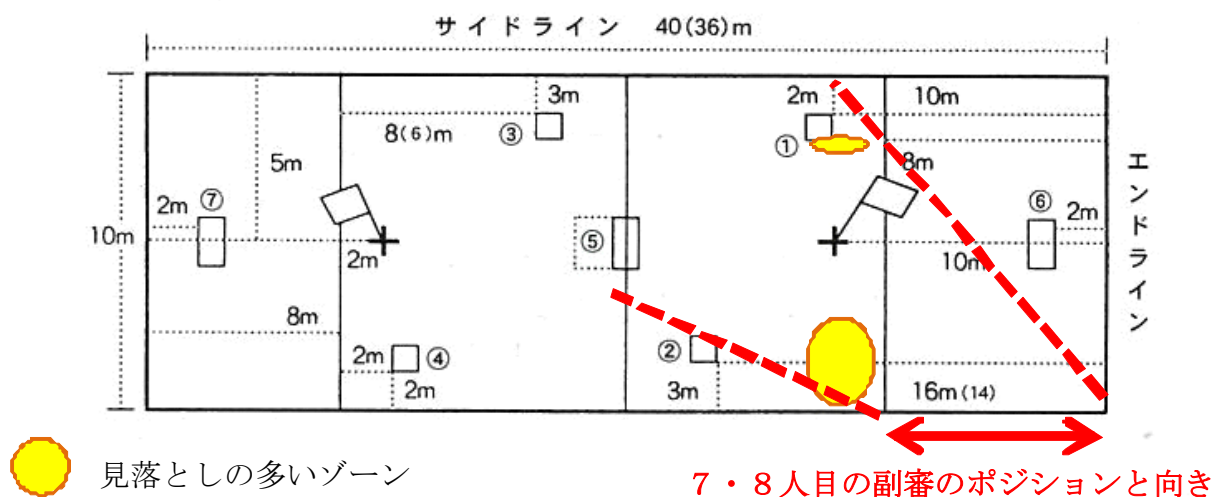
② 8人制とした場合、7・8人目の副審のポジション・向きはどうあるべきか？

→6人制で一番見落としの多いのが、フリー（前述）の選手と第2シェルターの内側のアウトであり、それらを判定しやすい位置・向きに配置し、第1シェルター担当副審を補完することが望ましい。

また、7・8人目の副審は、試合展開により立ち位置を流動的に変更することが望ましい。

【結論】 副審の向きについては、双方にメリット・デメリットがあり、その試合の審判の経験や力量などの要素によっても状況が変わるため、現段階でどちらが優位かを明言することは難しい。

8人制の場合の7・8人目のポジションは下図を基本とすることが望ましい。



■ 検証会終了後に引き続き、新委員によるルール・審判委員会合同会議を開催し、平成22～24年度の正副委員長の選任（互選）を行った。

選任結果は次のとおり（前年度正副委員長が全員留任）

- ルール委員会：阿野裕司委員長（胆振）、正木辰也副委員長（道央）
- 審判委員会：藤木勝宏委員長（胆振）、渋谷朋靖副委員長（道北）
